

元大都形成過程における至元二十年九月令の意義

著者	渡辺 健哉
雑誌名	集刊東洋学
巻	91
ページ	77-96
発行年	2004-05-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132599

元大都形成過程における至元二十年九月令の意義

渡 辺 健 哉

はじめに

至元三年（一二六六）に建設が開始された大都城の宮城は、至元十一年に至りようやく完成を迎えた。この年の正月に、「宮闕告成、帝始御正殿、受皇太子・諸王・百官朝賀。高麗國王王禩遣其少卿李義孫等來賀、兼奉歲貢。」とあるように、世祖クビライ（一二一五～九四）は大明殿において、モンゴル人貴族や官僚、外国からの使節たちによる朝賀を受け、帝都である大都城の完成を内外に宣言した。それから九年後の至元二十年、以下のような命令が出される。『元史』巻一二、至元二十年九月丙寅の條には、「徙舊城市肆・局院・稅務皆入大都。減稅徵四十分之一。」とある。これは、至元二十二年二月に布告される、金代の中都（南城）から新城大都への住民の移住規定と併せ、大都城の「首都」としての完成を示すものの一つとして夙に知られている。

かねてから、至元二十年の命令は注目されていた。陳高華氏は、その著書『元大都』の中で、「元朝政府は旧城内の商店と中央諸政庁・稅務關係機關等を大都に移した」と解釈した。^①翻って日本でも、杉山正明氏が典拠は明記せぬものの、「至元二十年にいたって外郭城内があらかた出来あがると、旧中都城内にあった主要官庁の移転を開始し、同二十二年二月には、旧中都の住民を資産制限つきでなかば強制して新城へ入居させ」たと述べる。^②この引用からも明らかなように、至元二十年の命令を「官庁の移転」と理解していることが察せられる。嘗て筆者も、これら先行研究の述べるところに依拠して、「至元二十年に官署の移転規定、至元二十二年には官吏及び一般住民の移住規定が公布された」とする理解を示した。^③

杉山氏の説明からは、市街区の完成を経たからの官庁の移転と富民の移住といった、大都城の都市空間があたかも

計画的に順次完成していった状況を想起させる。しかしながら、大都の都市空間は南城を包含したものと考えるべきで、整然とした計画の元で完成していったことに對しての疑問は前稿で提示した通りである。

そうであるとするならば、至元二十年の命令が本当に「主要官庁の移転」を指示するものであったのか。本稿では至元二十年の命令の分析を行い、併せてその意味するところについて明らかにしたい。なお本稿においても、前稿と同様に、「南城」「大都城」と區別して表記する。

一 「至元二十年九月丙寅の條」の再検討

抑も、至元二十年の命令を原文通り解釈すれば、どのようになるのであろうか。あらためて原文を掲げる。

徙舊城市肆・局院・稅務皆入大都。減稅徵四十分之一。これによると、かねて南城にあった「市肆」「局院」「稅務」を大都城に移転させ、そこで徵收する商稅は通常のそれよりも減じて四〇分の一とする、と解釈されよう。後に詳論するように、元朝廷下において商稅率は通常三〇分の一に設定されていたので、四〇分の一の徵收に変更ということになれば確かに減稅となる。従ってここで改めて問題とすべきは、「市肆」「局院」「稅務」の吟味ということになるで

あろう。以下ではこれらの語句について検討していく。

(1) 「市肆」

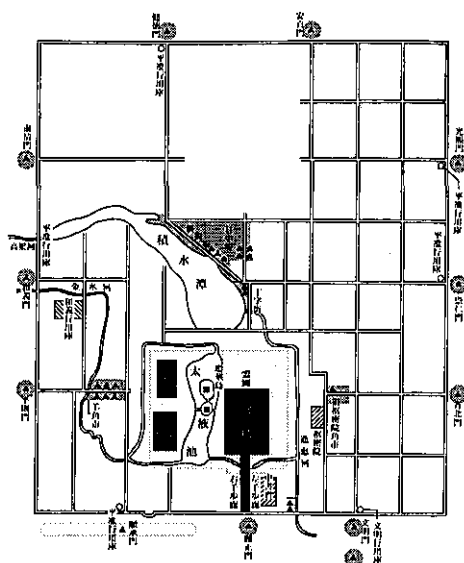
「市肆」は商店・市場を指すので、ここでは大都に集積した物資を市民に供給する商業空間の移転と解釈される。大都城内の市場について、『析津志輯佚』「城池街市」(五〇七頁)を一見すれば、^①食料、裝飾品、文房具、雜貨品、燃料、動物等の品物を売る「市」が多数存在したことが読み取れる。これらの市場は主に三つの商業地区に分散して置かれていた。『日下舊聞考』卷三八、京城總紀所引の『洪武北平圖經志書』によれば、「市は三。斜街市は日中坊に在り、羊角市は鳴玉坊・咸宜坊に在り、舊樞密院角市は南薰・明照二坊に在り。」とある。『洪武北平圖經志書』はその名が示す通り、洪武年間に編纂された北京地区の地方志で、姜緯堂氏の推定に従えば、洪武九年(一三七六)の後半から翌十年二月の編纂にかかるとされている。^②つまりこの引用文が元末大都の状況を示していることは注意を要する。引用史料によると、大都城内の市場は、宮城北側に広がる積水潭の北岸に沿った「斜街市」、西南の順承門の近くにあった「羊角市」、そして宮城東側に設置された樞密院の近くにあった「角市」の三カ所に点在していたという。

一般的に、大都城は宮城の北側に斜街市が存在すること

により、「面朝後市」の原則が貫かれていると理解されてきたため、これまでは斜街市に注目が集まっていた。しかしながら、斜街市が機能するには、通惠河が開通して、全国の物資が积水潭に直接運び込まれるようになる至元三十年以降まで待たねばならない。従って大都城完成当初、商店が集まった場所は、庶民が多数居住していた南城に近く、かつ官員を含めた多くの人が集まる宮城の周囲ということになるであろう。

至元十一年の段階で宮城が完成しているのだから、宮城周辺には多くの人が集まっていたことは容易に想像される。人の集まりやすい場所にこそ市場は立てられた。そこでまず、宮城を挟んで東西に置かれた、羊角市と角市について考察を加えていく。

羊角市については、『析津志輯佚』（五頁）に、「米市・麵市 鐘樓前十字街西南角にあり。羊市・馬市・牛市・駱駝市・驢驛市、以上の七處市、俱に羊角市一帯に在り」とある。鐘樓前十字街とは後述する斜街市を指す。羊角市には、羊市・馬市・牛市・駱駝市・驢驛市に加えて、米市・麵市が存在していたことを伝えている。米や麦粉などの食料品、羊や馬などの動物を売買する市場が置かれていた。ちなみに『老乞大』の主人公である、高麗からの商人が馬を売買する場所もまさにこの羊角市である。⁽³⁾



【図1】 大都城内の商業地区
杉山正明『世界史を変貌させたモンゴル』（角川書店、2000年）p111をもとに作図。▲は市場。

元朝中期の角市を含む、宮城周辺の雑踏の状況を『通制條格』卷二二、医薬、仮医が伝える。この條については、意味の把握し難い箇所があるので、敢えて試訳を掲げる。

元貞二年七月、中書省（都省が受けた）御史臺の書き写した監察御史の呈文には以下のようにあった。「ひそかに見るに、大都午門外の中書省、樞密院前及びバザール等の人の集まる場所では、法を畏れず、医者をかたてて薬を売る者が、蛇禽・傀儡を操り、手品をしたリシンバルを鳴らしたり、古い銭を新しい銭に替える

マジックをしたり、打楽器を鳴らすなどして多くの人を集め、偽って妙薬と言っている。無知の小人は、その薬が安いことに惑わされ、丸薬であれ粉薬であれ錢で贖買する。言われたとおりに服用するものの、薬と病氣とが合わず副作用が起き、枉死するものがある。考えてみれば、京師は天下の根本で、四方が範をとる所である。太医院がこれらのことを禁止しなければ、ただ人の生命を傷なうだけではなく、その上風紀まで乱すことになってしまう。理としてあまねく禁止させるべきである」と。都省は呈を准した。

午門は宮城の崇天門を指す。元貞二年（一二九六）七月の時点では、中書省は宮城前千步廊に設置されていた。また樞密院は宮城東側の保大坊に設置されていたので、樞密院前の市場とは宮城東の角市を指すのであろう。『洪武北平圖經志書』が「舊樞密院」と記すのはここを指す。角市や「バザール」には人が集まるため、医学の知識を持たない、法を畏れぬ輩が、言葉巧みに耳目を集め、廉価につられた無知な庶民に薬を売りつける。所詮は医学の知識を持たない詐欺師の薬ゆえ、服用した者はかえって病気を悪化させたという。このような人間の取り締まりを中書省に訴えているわけであるが、この史料からは市場における大道芸や、それに集う群衆の存在が窺える。

また、羊角市が平則門から城内に進んだ中途に、角市が文明門と麗正門から城内に進んだ中途に、それぞれあったことにも注意を加えておきたい。門が起点となっているのは、門の周囲には所謂「廂」とよばれた商業地区が発達していたことはもちろん、遠方から来た商人が集まりやすかったからであろう。有名な黄仲文「大都賦」は、城門周辺の賑わいを「文明は舳艫の津たり、麗正は衣冠の海たり、順承は南商の藪たり、平則は西賈の派たり」（『宛署雜記』卷一七、民風一「土俗」所引）と詠う。文明門の前を流れる通惠河には船舶の往来が絶えず、宮城正南の麗正門前では官吏が動き回り、南城と接する順承門は江南からの商人で賑わい、西の平則門には西方からの商人が往来する様子を伝える。城門が人々の集まる象徴と認識して詩歌に詠み込んでいる点は興味深い。

これら門の周辺には、城門を出入する商人や送迎客相手の酒樓が軒を連ねた。『析津志輯佚』「古蹟」（二〇六～八頁）には大都城と南城の酒家が列挙されている。これらの所在地は「在某々門」と記され、中でも順承門や文明門、そして麗正門の近くに置かれていたことが確認できる。

一方で、斜街市の繁盛する状況は元代後半期の史料に現れ出す。斜街周辺、特に大都城のランドマークたる鼓樓・鐘樓を中心とした空間はとみに活況を呈した。商人が集ま

るに随つて、斜街周辺では飲菜街まで発展していることからもそれが徴される。『析津志輯佚』（一〇八頁）には、「西斜街は海子に臨み、率ね歌臺・酒館多く、望湖亭有り。昔日皆貴官遊賞の地たり。樓の左右俱に果木・餅麪・柴炭・器用の屬有り。」とあつて、海子（積水潭）を望む斜街には「歌臺」や「酒館」が多く存在し、かつては官僚の行楽地であり、あわせてその周囲には、食料品や燃料、日用品を売る店舗が立ち並んでいたことを伝える。ここからも斜街の盛況ぶりを垣間見ることが可能であろう。

最後に、元末大都城における市場全体の活況を伝える史料として、『永樂大典』卷二六一一、臺字所引『南臺備要』「整治鈔法」の一節を掲げよう。これは、至正十一年（一三五二）六月の戸部の提言である。

本部議得「各處有司・提調官及庫官・庫子人等、多不奉公、縱令公使人等、及權豪勢要、街市無籍之徒、同結攬小倒。自五門・順承等門、羊市角・鐘樓前・樞密院東十字街、人民輦集去處、往往羣聚、公然倒換昏鈔、拾兩內除壹兩、或壹兩伍錢、甚至貳兩者有之。以致民間行用捨除搭頭鈔兩、沮壞鈔法、良由於此。……」

「五門」は音通から「午門」を指すのであろう。午門を南に進むと麗正門である。麗正門は南城との往還に利用されたため、この直線上には多くの人々が集まった。他にも麗正

門の西側の順承門周辺、すなわち羊角市や、鐘樓前の斜街周辺、樞密院東の十字街、すなわち角市での状況を伝える。そこでは役人が職務に励まず、在地の有力者や無頼が、破損しかけた鈔（昏鈔）と新鈔とを不法に交換する輩と結託しているのを見過ごしている。周知のように、元朝では昏鈔と新鈔の切り替えは、光熙・文明・順承・健徳・和義の各門に設置された交鈔庫で行われ、その際に発生する手数料は政府にとり重要な収入となつた。民間での流通において、昏鈔は敬遠され、本来の額面よりも割り引かれて取引されることさえあつたため、利用者は新鈔への交換を求めた。しかし一日当たりの交換量が決められていたことや、役人の怠慢により、往々にして円滑に行われることがなかつた。そのためこうした昏鈔から新鈔への交換が白昼堂々と行われていたと考えられる。ここからもまた、多くの人々が市場に群がる状況を垣間見ることができよう。

繰り返しになるが、斜街市の発展は元末まで待たねばならないので、至元二十年前後であれば、宮城近辺の羊角市と角市に市場が立てられ、徐々に商業地区が形成されていったと考えられる。そして、市場の移転は飲食店の移転や出店を促し、これに伴って人々をも新城である大都城へ徐々に向かわせていったのである。

(2) 「局院」

「局院」は官営工場を指す。すでに指摘されているように、元朝政府は各地の手工業職人を最初は南城に、次いで大都城に強制的に集めて、手工業に従事させていた。局院については鞠清遠氏によって研究の先鞭がつけられ、さらにそれを補訂した李幹氏により、官営工場は工部、將作院、大都留守司、武備寺、徽政院、儲政院等に所属したことが明らかに¹⁴なっている。また、工場で働いていた局匠の生活や管理の方法等についても、鞠清遠、李景林、松田孝一等の各氏による分析が進められた。ここでは、それら先行研究では指摘されていない、大都地区における局院の所在地について考察を加えていく。

まず、南城に置かれた局院として確認できる貂鼠局につき、『析津志輯佚』「物産」(二三三頁)の一節を掲げよう。

鼠狼之品 銀鼠【以下、割註】……遼東鬼骨多之。有野人於海上山藪中鋪設、以易中國之物、彼此俱不相見、此風俗也。此鼠大小長短不等、腹下微黃。貢賦者、以供御、幃幄・帳幔衣被之。每歲程工於南城貂鼠局。

この史料については、若干の説明を要する。まず、「鬼骨」とは「骨鬼」が転倒したもので、これまでの研究によって、サハリンに住むアイヌ民族のことを指すとされている。¹⁵「彼此俱に相見ず」とあるのは、かの地においては所謂「沈黙

交易」が行われていたことを示唆している。¹⁷『經世大典』を引用した、蘇天爵『國朝文類』卷四一、招捕、遼陽骨鬼によれば、長期間に渉り、元朝と抗争を続けていた骨鬼は、至大元年(一二三〇八)に「毎年異皮を貢す」ことが課せられた。これまでの研究では『國朝文類』所引『經世大典』に依拠して、至大元年以降の動向を不明としている。しかし、『析津志』が元末の編纂にかかることから、元末まで貢納が続けられていたことが窺えられよう。これによれば、骨鬼から貢納された高級な「銀鼠」白イタチの毛皮を加工する貂鼠局が南城にあったという。貂鼠局は、『元史』卷九〇、百官志六、利用監によれば、至元十九年の設立とされ、名称から明らかなようにテンやイタチの皮製品を製造する工場であった。更にこの史料からは、大都城への移転規定が公布されたとはいえ、『析津志』の編纂された元末まで、南城で作業する工場も存在したことが読み取れる。

次いで大都城の局院の所在地について検討していく。まず『永樂大典』卷一九七八一、局字で鞍轡局を説明するにあたり『元史』を引用する。そこには、「鞍轡・皮作・軍器・顔料等の局太平街の西に在り。」とある。『元史』に該当する一文を見出すことはできないので、これは『元史』百官志の材料とされる、『經世大典』の佚文と考えると誤りあるまい。¹⁸「太平街」は、『析津志輯佚』に場所不詳の坊として

表記される「太平坊」に該当するのであろう。太平坊は大承華普慶寺や大天源延聖寺が置かれた坊として知られ、これら寺院の位置から、宮城の西北にあったと考えられている。「元史」では、鞍轡局・皮作局・軍器局・顔料局について、それぞれ独立した局院としての確認はできないものの、その名称から武器や防具に関わる工場と判断できるであろう。これら軍需用品を製造する工場が一箇所に集まり、作業していたと見られる。

また『析津志輯佚』「城池街市」(二頁)が伝える、「阜財坊」の説明には、「順承門内の金玉局巷口に在り」とあって、順承門に接する阜財坊には金玉局が存在していた。金玉局は『元史』卷八八、百官志四によれば、将作院所属の局院であり、中統二年(一二六二)に金玉局として設立され、至元三年に諸路金玉人匠総管府と改称され、その下には多くの局院が置かれた。史料上の制約から若干の例示に止まるが、大都城内に官営工場が置かれていたことが確認できる。

ところで官営工場が設置されるということは、皇族やモンゴル人貴族による需要があったと考えられ、至元二十年以前に彼らは大都城に居住していたと考えるべきであろう。実際、至元十年代において、大都城内に功臣・諸王に対する居住地が割り当てられていた事実を確認し得る。『道園學古録』卷四二、「夏國公諡襄敏楊公神道碑」には、

至元十年^孝年、始大城京師於大興故城之北、中爲天子之宮、廟社朝市各以其位、而貴戚功臣、悉受分地以爲第宅。式臘公得建地和寧里、在内朝之西北、於朝謁爲近。

とある。「式臘公」は、タングート²³の名族、失刺唐吾台を指し、武宗・仁宗朝で活躍する楊教化・楊朵児只兄弟の父である。この史料の述べるところに拠れば、至元十年代のこのとして、「貴戚功臣」の宅地が分与され、失刺唐吾台は和寧里²⁴に住宅を建設したと伝える。王璧文はこの史料に基づき、「和寧里」は宮城の西側に比定する。他にも、至元十八年に、世祖の異母弟である末哥^{モゴ}の長男永寧王昌童の邸宅が太廟の前に置かれかけたが、結局田忠良の反対によつて取り止めになったことが確認できる。邸宅建設の提案に止まったとみなせるかもしれないが、王の一人が大都城に邸宅の建設を図ったということは、その他の諸王にも住宅を与えられていた可能性がある。

少なくとも至元十年代にモンゴル人貴族やタングート族などの功臣に対し、大都城内に土地が与えられ、住宅建設が許可されていたことを窺わせる。官営工場の移転はこうした人々の需要を満たすために実行されたと考えられる。

(3) 「税務」

「市肆」が立ち並ぶことに伴い、商税を徴収する機関が必

要となる。それが「税務」と呼称された商税徴収機関である。大都の税務については、『日下舊聞考』巻六三、官署所引の『稼堂雜抄』が以下のように述べる。

元於大都腹裏設税務七十三處。其在京城者、猪羊市・牛驢市・馬市・果木市・煤木所、有宣課提舉司領之。

大都城・南城はもとより、山東・山西・河北を広く包含する中書省Ⅱ腹裏には、七十三ヶ所の税務があつたとする。特に大都城に設置されたのは、猪羊市・牛驢市・馬市・果木市・煤木所で、それを大都宣課提舉司が統轄していたという。『元史』巻八五、百官志一、戸部には、至元二十二年（一二八五）に煤木所、至元三十年に馬市・猪羊市・牛驢市・果木市、至大元年に魚鹽市がそれぞれ設置されたことを記す。ここに挙げられている提舉司の設置年代が、すべて至元二十年以降であることは注意しておきたい。

大都宣課提舉司については、『元史』巻八五、百官志一、戸部に、「諸色の課程を掌り、併せて京城の各市を領す」と記されるように、各種の税課と市場に集まる商品にかかる税の徴収を管理した。これまでも度々指摘されているように、商税は元朝の国庫収入の一角を占めた。天暦年間の商税の全国合計の九三万九五二九錠の内、大都宣課提舉司は一〇万三〇〇六錠で、大都路の八二四二錠と合わせると、全体の約十一%を占める。

商税の納付手続きは、以下のようなになされたと考えられている。すなわち、客商が持ち運ぶ商品の品目と数量、そしてそれらにかかる商税の税額を証明書（引）に記入し、それを呈示して城内に入る。城内で商品売り捌いたら、その足で税務に赴き商税を納税することになっていた。

以上、検討を加えたように、「市肆」「局院」「税務」はそれぞれ、商店の集まる商業空間、官営工場、商税の徴収機関を指した。つまり至元二十年の「移転規定」とは、少なくとも「主要官庁」と呼ばれるようなものではなく、モンゴル人貴族に対して生活必需品を製造する官営工場、商品を販売する市場、それに伴って発生する商税を徴収する官署の移転を指していたと理解される。

改めて詳細に論じる予定であるが、南城から大都城への官庁の移転は至元二十年以前にすでに行われていた。例えば、中書省は大都城の建設開始直後にあたる至元四年に宮城の北側にあつた鳳池坊に設置され、また御史台も至元五年に大都城の西北にある肅清門の近くに設置されている。一方これとは逆に、秘書監にいたつては、至元十二年から移転を訴えているにも拘わらず、皇慶元年（一三二二）になつてようやく移転を遂げている。このように、「中央諸政庁」「主要官庁」と呼べる政府の建物が、至元二十年を境に

移転していったという事実を見出すことはできない。

次に考察すべきは、至元二十年に至って「市肆」「局院」「稅務」の移転を行った背景となるであろう。章を改めてさらなる検討を加えていくこととしたい。

二 至元二十年の命令の背景

実はこの至元二十年の命令と密接に関係する史料が、『元史』巻九四、食貨志二、商税の一節に残されている。原文を以下に掲げる。

是年（至元二十年）、始定上都稅課六十分取一、舊城市肆・院・務遷入都城者、四十分取一。

これは、通常約三・三％徴収されていた商税を、上都については約一・六％、大都については約二・五％にするという、二つの都市に限って特例的に税率を変更したものである。一見して理解されるように、食貨志で「舊城の市肆・院・務」とされているところが、本紀では「舊城の市肆・局院・稅務」と表記されている。すでに上都では「勅するに上都の商稅六十分して一を取る」とあって、七月に税率の変更が実施されていた。これに続けて冒頭で記したように、九月に大都でも税率の変更が実施されたのである。

またこれと併せて、前年の至元十九年には、商稅徵收機

関の統廃合が実施されたことも看過できない。至元十九年のこととして、「大都・舊城の兩稅務を併せて大都稅課提舉司と爲す」（『元史』巻八五、百官志一、戸部）とあるように、大都城と南城に置かれていた商稅徵收機関が統合されて「大都稅課提舉司」となった。大都稅課提舉司の設置は、至元十九年という時期から判断して、大都城に市肆や稅務を移転させるための準備措置であったと考えられる。

このように、『元史』食貨志との対照から明らかなごとく、これまで主要官庁の移転規定と見なされてきた『元史』本紀の一文は、商稅改革の一環と位置づけ直す必要がある。では至元二十年に至り、なぜ商稅改革を行う必要が生じたのであろうか。

至元十三年に南宋を滅ぼした元朝は、「第二次南北朝時代」とも称される、長期間に渡る分裂時代をようやく解消する。これにより大都城は、中華世界の国都としての変容が求められた。屢々引用される、『元史』巻九三、食貨志一、海運志冒頭の「元燕に都す。江南を去ること極めて遠く、百司庶府の繁、衛士編民の衆、江南に仰給せざる無し」という一文で注意すべきは、新たな国都となった大都には、多くの官員や軍士が雑居するため、物資の供給は江南に頼らざるを得ないと理解されている点である。都市社会学の藤田弘夫氏による「都市の規模は、都市の権力がどこまで他

の人的、物的資源を統合できるのかにかかっていた」という指摘にもある通り、元朝政府にとつて、突如として巨大消費地に変貌した大都を維持するため、江南の物資を運び入れることは喫緊の課題となった。

元朝政府は二つの施策によりこの課題を克服しようと試みた。それが、以下で説明を加える、商人に対する保護政策とインフラの整備である。

(一) 商人に対する保護政策

元朝治下において、江南の豊富な物資を大都に運ぶに際しては、元朝政府は南北間の長距離輸送を担う客商に依存をしていた。客商に対する依存度の高さは、『通制條格』卷二七、雜令、拘滯車船の各條で述べられている。例えば、至元二十年の都省の言に「江淮等處の米粟は客旅をして任從して興販せしむ。官司の阻當するを得る母かれ」とあり、至元二十五年三月の尚書省の發言にも、「大都居民の用ふる所の糧料は全て客旅の興販・供給に籍る」と述べられるのは、その一例である。それゆえかれらの活動を促進させるため、客商に対する保護政策を元朝政府は実行した。

宮沢知之氏によれば、元朝の商税は販売地納入であるため、客商の負担は少なく、それは大都を終着点とする南北流通を促進させるためであったという。この論に依拠すれ

ば、抑もが通常三〇分の一という低率に設定されているとはいへ、至元二十年に至り、大都を四〇分の一、上都を六〇分の一とそれぞれ低率に設定し直すことで、税制上の特典を付与し、さらなる商人誘致を図ったと考えられる。

また、宮沢知之氏が指摘する商人保護政策としては、牙行に対する統制もあつた。これにより、牙行は水面下で活発な動きをみせるような形となり、一層の広まりを齎す結果を招来したという。だが一方で、牙行に対する統制からは、元朝政府による客商保護の姿勢もまた再確認できる。

こうした牙行に対する統制のみならず、江南の客商に対しての直接的な保護も加えられた。南宋の首都臨安を陥落させた直後の至元十三年四月、『元史』卷九、至元十三年四月庚午の條に、「勅するに南商の京師に貿易するを禁ずる母かれ」とあるように、客商に対する保護がいち早く述べられていることは大いに注目される。

具体的な商人保護政策とは、絶え間なく発生した、盜賊と官吏による不法な収奪からの保護であつた。盜賊の横行や官吏の収奪について述べる史料は枚挙に暇がない。『大元聖政國朝典章』（以下『元典章』）卷五九、工部二、造作二、船隻の各條、及び『通制條格』卷二七、雜令、拘滯車船の各條には、犯罪の報告とそれに対する取り締まりの強化が繰り返し述べられている。以下で実例を検討していく。

まずは盗賊の被害について述べているものを紹介しよう。『元典章』卷五一、刑部一三、諸盜三、捕盜、添給巡捕弓箭によれば、

大徳三年五月、承奉中書省劄付、近爲御河・會通河（河？）道北自大都、南抵江淮、通運係官諸物、富商・客旅經行、多有盜賊生發。……

とある。大徳三年（一二九九）になると、官物を運搬する客商を狙った強盜が頻発していたという。安山から北上し臨清までの會通河と、臨清から直沽に至る御河、さらには、直沽から通州までの白河は南北を結ぶ大動脈であった。引用文に續けて、巡捕を増設して取り締まりを強化するように命令が出されている。

また、船戸による不正行為も伝えられる。『通制條格』卷二七、雜令、拘滯車船の史料からそれを探ってみたい。この條文についても試訳を掲げる。

至元二十九年一月十一日、御史臺が上奏した。「大都で毎年人民が食する食料は、多くが客商により江南から御河を使ってここ（大都）に持ってきて売られている。（よつて）来るものが多ければ値段は下がり、来るものが少なければ値段は上がる。現在大都における米価は以前と比較して高くなつた。米価が上がった理由は官船が官物を運搬するときに、船戸らが權威をかさにき

て「官船を壊した」と言つて、反対に客商らの船を強奪し、鈔が与えられれば許し、鈔が与えられなければ、民に官物を運搬させるからである。さらに權力のある人ならば、客商らに対して阻害する。このような状況なので、客商らの来るのが少なくなり、米価が上昇した。……」

船戸とは、船隻を保有する地方有力者で、官の雇傭に依じて船と乗組員を提供した。彼らによる商人に対しての苛虐により、米価が上昇したことを憂えている。たとえ、史料に現れなくとも、客商の活動を阻害する人間が甚だしく多かつたことは想像に難くない。

さらに、『元典章』卷二二、戸部卷八、雜課、收稅附寫物主花名の至元三十年の御史台の呈文には、「大都稅課提舉司の官吏、客旅盛天英等の納到せる布足の稅錢を欺隱す」とあつて、そもそも商稅を徵收する大都宣課提舉司の官員が客商によつて支払われた商稅を横領することさえもあつた。こうした官員の客商に対する不法行為は全国的かつ日常的に行なわれ続けたと考えるべきであろう。

かかる実情がある一方で、元朝政府は客商の存在により大都の食料が賄われていることを十分に認識していた。だからこそ、政府は客商の危機について把握しており、おそらくそれがさしたる効力を發揮し得なかつたとしても、

かれらに対する保護を繰り返し通達していたのである。

(2) 税糧輸送ルートの整備

こうした商人に対しての保護を行いつつ、一方で、江南からの物資を大都へ順調に運び込めるようにするため、インフラの整備を行った。当初、元朝政府は運河による大都への物資供給を確保しようと試みていた。このことを概括的に伝えるのが『元史』巻九三、食貨志一、海運である。

初、伯顔平江南時、嘗命張瑄・朱清等、以宋庫藏圖籍、

自崇明州從海道載入京師。而運糧則自浙西涉江入淮、由黃河逆水至中灤旱站、陸運至淇門、入御河、以達于京。

南宋攻略の指揮官の一人であった伯顔は、張瑄・朱清に命じて押収した文化財や公文書の輸送をさせる。輸送にあたって、文化財は海運を使って運ぶのに対して、税糧は黄河などの河川を利用して北上し、開封の西側にある中灤で黄河を降り、中灤から淇門までは一旦陸運に切り替わり、御河を利用して大都に運び込まれたとする。税糧も至元十九年になされた伯顔の提言に従って、主に海運が利用されるようになっていく。

ここで問題とすべきは、御河からどのようにして「以て京に達」したのかという点である。御河の終点は大都の東にあった通州である。北京を国都とする王朝にとり、南北

輸送にあたっての最後の行程となるのは、この通州から北京地区までの約五十里（約二十八キロメートル）の輸送であった。金代でも「漕河」と呼ばれた漕運ルートが、韓玉の^①上言に従って泰和年間に開削された。だがしかし、地勢が急峻であったために一定の水量を確保できず、船底がこすれてしまい、実際には^②さしたる効果をあげぬまま、結局は陸運に切り替わっていく。当然のごとく元朝政府もこの問題と向き合わねばならなかった。

従来から通州・大都間の輸送につき注目されてきたのは、本稿でもしばしば触れてきたように、至元三十年に完成をみた通惠河である。しかしながら通惠河が機能を果たすには、世祖クビライの治世の末期まで待たねばならず、それまでのようにして通州・大都間の運搬を行っていたのかについては、別に検討がなされてしかるべきであろう。これまでの研究では、通惠河の開鑿に功績のあった、郭守敬の「行状」の、「先時通州より大都に至るに、官糧を陸運すること、歲ごとに若干萬石、秋の霖雨に方りて驢畜の死せる者、勝て計るべからず。是に至りて皆罷む。」（『國朝文類』巻五〇、齊履謙「知太史院事郭公行状」という記事や、『元史』巻六四、河渠志一、通惠河に依拠して、陸運に全てを頼っていたかのように考えられてきた。しかし、確かに一部が陸輓で運ばれることは当然あったかと考えられる

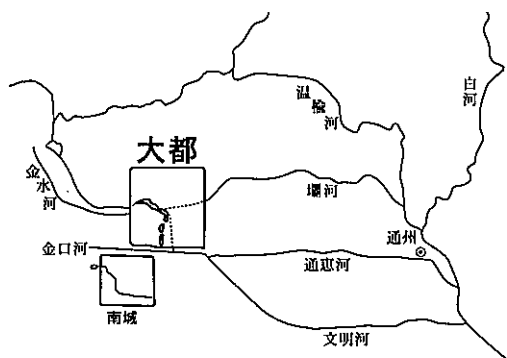
が、陸運だけですべてを処理していたわけではなかった。すなわち、これまであまり注目されてこなかった壩河と呼ばれる漕運河が存在したのである。

壩河は阜通七壩とも称された。^⑤七壩は、「阜通の千斯・常慶・西陽・郭村・鄭村・王村・深溝の七壩」（『國朝文類』卷三一、宋本「都水監事記」）を指す。なお、「壩」は「堤」とは河水をせき止め、流量を調整するための施設のことである。^⑥蔡蕃氏の復元研究によれば、壩河は通州から榆河を北上し、深溝村で西に転じ、通惠河の北側を並行して流れ、光熙門の南側から大都城に進入していったとされている。^⑦光熙門については、『析津志輯佚』（二二頁）に、

光熙門 與漕壩相接。當運漕歲儲之時、其人夫綱運者、入糧於壩内龍王堂前唱籌。

とあり、物資が運び込まれた際、光熙門近くの漕壩＝千斯壩で荷揚げが行われ、数量の確認をしたことが記される。蔡蕃氏の研究では、このルートはすでに中統年間より開かれたとされているが、運用に耐えうるものになるには、至元十六年まで待たねばならなかったと推測される。なぜなら、至元十六年に壩河の整備が行われたことが『元史』のいくつかの記事によって確認されるからである。

壩河の開削については、至正二年（一三四二）の監察御史王思誠による、壩河の夫戸の逃亡を憂う上言から詳細を



【図2】 大都周辺の河川
候仁之（主編）『北京歴史地図集』（北京出版社，1988年）
p 25 をもとに作図。

窺い知ることができる。『元史』卷一八三、王思誠伝には、
……又言「至元十六年、開壩河、設壩夫戸八千三百七十有七、車戸五千七十、出車三百九十輛、船戸九百五十、出船一百九十艘。……」

とある。壩河は至元十六年に整備され、そこで漕運作業に携わる人員として、壩夫戸八三七七戸が配置され、車戸五〇七〇戸から車両三九〇輛、船戸九五〇戸から船一九〇艘がそれぞれ供出されたとする。また『元史』卷八五、百官

志一、戸部にも、「新運糧提舉司、秩正五品。至元十六年始めて置かれ、站車二百五十輛を管し、兵部に隸す。運糧壩河を開設し、改めて戸部に隸す。」とあり、至元十六年に「新運糧提舉司」が設置され、壩河の管理に当たったことが記されている。さらにこれを『元史』本紀に徴すれば、『元史』卷一〇、至元十六年六月辛丑の條に、

以通州水路淺、舟運甚艱、命樞密院發軍五千、仍令食祿諸官雇役千人開浚、以五十日訖工。

とあつて、通州の水路が浅く舟の往航が困難を極めるため、樞密院に命令して五千人の兵士を動員させ、さらに官吏に労働者千人を雇傭させて浚渫工事を行わせている。「壩河」と明記されてはいないが、至元十六年に通州で浚渫工事が行われていることから、この工事も壩河に関連したものである可能性が高い。

壩河が運用されていたことは、『永樂大典』卷一五九五〇、運字所引『經世大典』「省臣奏准再定南北糧鼠耗則例」の一節から窺い知ることができる。

唐村等處船運至河西務、北糧每石破七合。直沽船運至河西務、南糧每石破一升二合。河西務船運至通州・李二寺、南糧每石一升五合、北糧每石五合。坨河站車運至大都省倉、南糧每石一升五合、北糧每石一升。

この史料は、江南や華北から大都に輸送される糧米のうち、

輸送途中や貯積中に損耗する分の許容限界量を規定したものである。これによると、華北と江南からの糧米はそれぞれ唐村と直沽を経由して河西務（渚州）に集積される。そのうち河西務から李二寺を経て通州まで輸送された。河西務と通州には河西務諸倉十四倉、通州十三倉が設置され、両所ともに元代漕運の要衝であつた。この通州から壩河と站車を利用して大都まで運ばれたとされている。この站車とは、先述の『元史』卷八五、百官志一に記される、新運糧提舉司に配置されていた「站車二百五十輛」を指すのであろう。陸路と運河を併用して大都城や南城の倉庫に運び込まれていったと考えられる。またさらに、この史料が至元二十九年八月の完澤の上奏を経た皇帝の聖旨の後に記録されていることにも留意しておきたい。恰も至元二十九年八月より通惠河の開鑿工事が開始されるわけであるから、壩河は通惠河が運用される直前まで、通州と大都を結ぶ運河として利用されていたと理解しうる。

こののちにも、度々浚渫工事が行われていることから明らかに、壩河の水量は不足しがちで、漕運としての機能を必ずしも充分には果たし得なかつた。『元史』卷六四、河渠志一、壩河によれば、冬期に至ると結氷することさえあつたようである。そもそも壩河を利用しなければ船が運航できなかつたところに、その限界性がすでに予見されてい

たともいえよう。従って、その後郭守敬による通惠河の建設へと繋がっていくのである。但し、通惠河が開通しても、大徳六年（一三〇二）に大規模な修復工事が行われ、また前述したように、元末の至正年間においても、王思誠がその改善策を上言していることなどからみても、元末まで壩河が運用されていたのは疑いない。

ところで、壩河が開鑿された至元十六年六月という時期に注意を払えば、この年の二月、崖山で抵抗を続けていた南宋の残存勢力はようやく降伏し、中華世界は完全に元朝の支配下に置かれた。その結果大都はこれまで以上に大量の物資が必要とされる状況に迫られたことになる。こうした状況の下で壩河の開鑿が実施された。筆者は、この時点で壩河の開鑿計画が存在していたこと自体、看過できない重要なことと考える。つまり、南宋が完全に滅亡した直後の至元十六年に通州・大都間の整備を行ったことは、江南からの最終ルートである、通州・大都間への漕糧輸送を、元朝政府が格別に重視していたことを裏付けれるものと推測されるからである。

また、大都への税糧輸送が至元二十年を境として大きく変化したことは、運び込まれた物資を保管する倉庫の整備によっても傍証される。『大元倉庫記』には、「在京諸倉」として大都に建てられた二十二の倉庫の規模と設置年代につ

【表1】京倉沿革表

倉名	広さ（間）	積貯量（石）	設置年代
相応倉	58	145,000	中統2（1261）
千斯倉	82	205,000	〃
通濟倉	17	42,500	〃
万斯北倉	73	182,500	〃
永濟倉	73	207,500	至元4（1267）
豊実倉	20	50,000	〃
広貯倉	10	25,000	〃
永平倉	80	200,000	至元16（1279）
豊潤倉	10	25,000	〃
万斯南倉	83	207,500	至元24（1287）
既盈倉	82	205,000	至元26（1289）
惟億倉	73	182,500	〃
既積倉	58	145,000	〃
盈衍倉	56	140,000	〃
大猷倉	58	145,000	至元28（1291）
広衍倉	65	162,500	至元29（1292）
順濟倉	65	162,500	〃
順豊倉	80	200,000	皇慶2（1313）
大有倉	80	200,000	〃
積貯倉	60	150,000	〃
広濟倉	60	150,000	〃
豊稂倉	60	150,000	〃

いて記されている。それを表にしたものが【表1】である。それによれば、倉庫は中統二年から建設されている。中統年間の建設は南城の近辺に建てられたと考えるのが妥当であろう。状況が変化するのは至元二十四年以降のことである。一見して明らかのように、積貯量が十四万石から二十万石程度の倉庫がそれまでとは違う頻度で建設されていることが看取できる。これは大都に居住する人間の数が増加したことを示すことはもちろん、客商の働きにより、物資の集積が順調に行なわれていたことも同時に示している

考えられる。

至元十六年の壩河の開削と、それに先立つ至元十三年の商人に対する保護とは、どちらも江南からの物資を大都に集積する目的の元に行われたといった点で、軌を一にするものであったといえる。これに続けて、本稿前半で見てきたように、至元二十年の商税の税率変更による優遇措置が実行された。これら一連の動きは、巨大都市となった大都を維持するため、江南からの物流を促進させるために必要な施策だったのである。

おわりに

以上、本稿で検討を加えたように、至元二十年九月の命令は南城から大都城へ中央官庁を移転させるという性格のものではなかった。これは、大都城における税務官庁・商店・工場の移転と、商税税率の再設定であり、南城にあった経済的重心を大都城に移すことと、江南の客商を大都城に集めることにこそ、その主たる目的があった。

至元二十年に官署を移転させ、その二年後に住民の居住を図った、という説明は、一見すると整然と都市が形作られる過程を想像させる。しかしながらこのような説明は、大都城が全くの無からできあがったかのように捉える理解か

ら生じていると考えられる。前稿でも触れたように、大都の都市空間が南城と大都城とを包摂したものとすると、その間の移動はごく自然に行われ、官庁の移転も決して整然としたものではなく、必要なものから優先的に大都城に建設されたと想定される。

本稿で考察を加えたように、至元十三年の商人に対する保護、インフラ整備の一環である至元十六年の壩河の開削、それに続く至元二十年九月の大都における商税税率の引き下げは、江南商人の視線を新たな巨大消費都市となった大都や上都に向けさせ、かれらの力により江南の豊富な物資を集め、さらなる流通の促進を狙った措置であった。

こうして至元二十年の段階で、新たな住民を大都城に受け入れる基盤を整備しつつ、この二年後に住民の移住規定を公布し、今度は本格的な人口集中が図られた。こののち、至元三十年の通恵河の完成により、宮城の北側に広がる积水潭に江南からの物資が直接運び込まれることをもって、大都への物流がより一層促進されたのであった。

注

(1) 『元史』卷八、至元十一年正月己卯朔の條。

(2) 『元史』卷一三、至元二十二年二月壬戌の條。

- (3) 陳高華『元大都』（北京出版社、一九八二年、のち佐竹靖彦氏により『元の大都』中公新書、一九八四年、として訳出）三七頁。訳書では五八頁。引用文は佐竹訳による。
- (4) 杉山正明『クビライと大都』（梅原郁（編）『中國近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所、一九八四年、のち『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会、二〇〇四年所収）一三三頁を参照。
- (5) 拙稿『元代の大都南城について』（『集刊東洋学』八二、一九九九年）一一一頁を参照。以下「前稿」とする。
- (6) 本稿では、北京図書館善本組編『析津志輯佚』（北京古籍出版社、一九八三年）を利用した。なお大都城における市場の位置については、王璧文『元大都城坊考』（『中国营造学社集刊』六一三、一九三六年）が一覧表にまとめてある。近年でも、楊寬『中国古代都城制度史研究』（上海古籍出版社、一九九三年）四九八―五一一頁が、やはり『析津志輯佚』を利用して詳細な考察を加えている。ただ、両者とも市場の位置の復元を目的としているため、何時の時点で市場が置かれたのかという視点は欠落している。
- (7) 『洪武北平圖經志書』については、姜緯堂（『洪武北平圖經志書』考）（『京華旧事存真』一、一九九二年）を参照。
- (8) 陳高華『從「老乞大」《朴通事》看元大都的社会生活』（『北京史苑』三、一九八五年）を参照。
- (9) 元貞二年七月、中書省。御史臺備監察御史呈「切見大都午門外中書省・樞密院前及八匠兒等人煙輦集處、有一等不畏公法、假醫賣藥之徒、調弄蛇禽・傀儡・藏獠・撒鉢・到花錢・擊魚鼓之類、引聚人衆、詭說妙藥。無知小人、利其輕售、或丸或散、用錢贖買、依說服之、藥病相反、不無枉死。參詳京師天下之本、四方取法者也、太醫院不爲禁治、不唯誤人性命、實傷風化。理宜通行禁治。」都省准呈。
- なお、八匠兒の解釈については、方齡奇（『通制條格』釈詞五例）（南京大学元史研究室（編）『內陸亞洲歴史文化研究』南京大學出版社、一九九六年）、方齡奇校注『通制條格校注』（中華書局、二〇〇一年）六〇〇頁を参照。また本条については、梅原郁（編）『訳注 中國近世刑法志（下）』（創文社、二〇〇三年）二九三頁も参照。ちなみに、方齡奇『校注』も梅原『訳注』も「到花錢」については詳びらかにしない。梅原『訳注』では、「倒は交換、すりかえの方向の意味と思われるが詳しくは不明」とする。ところで、「倒鈔」とは周知のように、古鈔を新鈔に交換する意味である。従って「到花錢」とは、古鈔を一瞬にして新しいものに変える手品では無からうか。とりあえず本稿では、このように訳出しておいた。
- (10) 朱啓鈴『元大都宮苑圖考』（『中国营造学社集刊』一一二、一九三〇年）の註（19）を参照。
- (11) 主に宋代の史料を利用しての記述であるが、酒楼については、中村喬『宋代の料理と食品』（中国藝文研究会、二〇〇〇年）四〇二―四一五頁が詳しい。
- (12) 元朝における交鈔の具体的運用状況については、前田直典『元代に於ける鈔の發行制度とその流通状態』（『北亞細亞学報』三、一九四四年、のち『元朝史の研究』東京大学出版

会、一九七三年所収」を参照。

- (13) 船田善之「元代史料としての旧本『老乞大』——鈔と物価の記載を中心として——」〔『東洋学報』八三一、二〇〇一年〕では、いわゆる旧本『老乞大』を利用して、昏鈔から新鈔への交換状況を具体的に述べる。

- (14) 鞠清遠「元代係官匠戸研究」〔『食貨』一一九、一九三五年〕、及び李幹「元代社会経済史稿」〔湖北人民出版社、一九八五年二二九、二四三頁を参照。なお、大都留守司については、拙稿「元朝の大都留守司について」〔『文化』六六一・二、二〇〇二年〕で考察を加えた。

- (15) 元朝治下の工匠については、前註鞠清遠論文の他、李景林「元代的工匠」〔『元史及北方民族史研究集刊』五、一九八一年〕を参照。またモンゴル帝国期の工匠については、松田孝一「モンゴル帝国における工匠の確保と管理の諸相」〔同代表「碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究」平成12・13年度科学研究費補助金報告書、二〇〇二年〕を参照。

- (16) 「骨鬼」についての研究成果は、日本史・東洋史・考古学等の膨大な蓄積が存在する。本稿では、紙幅の都合から、近年に公刊された榎森進「北東アジアから見たアイヌ」〔菊池勇夫（編）『日本の時代史一九 蝦夷島と北方世界』吉川弘文館、二〇〇三年〕を挙げるに止める。

- (17) 異文化間での交易の原初形態とみなせる沈黙交易については、南方熊楠や鳥居龍蔵らを先駆とする幾多の研究がある。ここでもまた近年の研究ということで、相田洋「鬼市と

夜市——沈黙交易に関する中国史料——」〔『福岡教育大学紀要』三七―二、一九八八年、のち改題して『異人と市』研文出版、一九九七年所収。だけを挙げておく。

- (18) 『永樂大典』引用の『元史』が『經世大典』の佚文であることはしばしば散見される。陳高華「元大都史事雜考」〔北京市研究会（編）『燕京春秋』北京出版社、一九八二年〕の指摘による。

- (19) 寺院の場所については、王鑒文「元大都寺觀廟宇建置沿革表」〔『中國當造学社彙刊』六一四、一九三七年〕を参照。

- (20) ただし、『南村輟耕錄』巻二一、宮闕制度には、「生料庫在學士院南、又南爲鞍轡庫、又南爲軍器庫、又南爲牧人廂人宿衛之室。」とあって、こうした局院で製造された武器を保管したとみられる倉庫が皇城西部に置かれていたことを確認しうる。

- (21) 大都の坊名については、前掲註(6)王鑒文「元大都城坊考」を参照。

- (22) 『元史』巻二〇三、田忠良伝。

- (23) 『元典章』巻九、吏部三、場務官、内外稅務策闕は、「大都等處販賣稅務七十三處」とし、徵稅機關を列挙する。

- (24) 「課程」が賦稅全般を指すことは、『元語言詞典』（上海教育出版社、一九九八年）一五七頁を参照。

- (25) 宮澤知之「宋代中国の國家と經濟——財政・市場・貨幣——」〔創文社、一九九八年〕二四九頁は、『元史』巻九四、食貨志二、商稅にもとづき「天曆商稅額數」を掲げている。

- (26) この部分については、『元典章』巻二二、戸部八、課程、江

南諸色課程にもとづいて説明している、前註宮澤知之『宋代中国の国家と経済』二四八頁、及び前掲註(9)梅原『訳注』一六二頁を参照した。

(27) 筆者は、第二十四回白馬合宿(内陸アジア・イスラム研究者集会)(二〇〇〇年八月二日)、及び二〇〇〇年度東北史学会大会(二〇〇〇年十月八日)において、大都城内における官署の建置に関しての口頭発表を行った。これについては、別稿を用意している。

(28) 『析津志輯佚』「朝堂公宇」(三三二頁)。

(29) 『析津志輯佚』「臺諫鼓 創建治革」(三八頁)。

(30) 『秘書監志』卷三、扉字。

(31) 『元史』食貨志の記事は、前掲註(3)陳著書の一〇一頁(訳書一四六頁)に掲げられてはいるながらも、『元史』本紀と関連づけて論じてはいない。

(32) 『元史』卷二二、至元二十年七月丙子の條。

(33) これが一体いつのことかは判然としない。但し、『元史』卷一二、至元十九年二月己酉の條に、「減省都官冗員。改上都宣課提領爲宣課提舉司。立鐵冶總管府、罷提舉司。減大都稅課官十四員爲十員。」とあり、大都稅課提舉司の官員削減が行われている。二つの官署を一つにすることで余剰人員が生まれ、官員の削減が行われたとするならば、至元十九年二月の前後に官庁の統合が行われた可能性がある。

(34) 愛宕松男・寺田隆信『中国の歴史 6 元・明』(講談社、一九七四年、のち『モンゴルと大明帝国』講談社学術文庫、一九九八年として復刻)第一章を参照。

(35) 藤田弘夫『都市と権力——飢餓と飽食の歴史社会学——』(創文社、一九九一年)七八頁を参照。

(36) 元朝治下の商人については、高榮盛『元代商人研究』(南京大学元史研究室(編)『内陸亜細亞洲歴史文化研究』南京大学出版部、一九九六年)を参照。商業政策については、前掲註(25)宮澤知之『宋代中国の国家と経済』二三三―二七八頁、徳永洋介『元代稅務官制考——ある贈收賄事件を手がかりとして——』(『史泉』六八、一九八八年)を参照。

(37) 前掲註(25)宮澤知之『宋代中国の国家と経済』二五二―二六〇頁を参照。

(38) 至元二十九年正月十一日、御史臺奏「大都裏毎年百姓食用的糧食、多一半是客人從迤南御河裏搬將這裏來賣有。來的多呵賤、來的少呵貴有。如今、街下有來的米、比已前貴有。這米貴了的緣故、官船搬運官糧諸物呵、船戶每倚着官司氣力、壞了官船也麼道。却奪要了客人每的船隻、與了鈔放了、不與鈔呵、教百姓每船運官物。更有氣力的人每行呵、客人每根底阻當。爲那般呵、客人每來的少的上頭、米貴了有。……」

(39) 船戶については、星斌夫『元代海運運営の実態』(『歴史の研究』七、一九五九年)を参照。

(40) 元朝前半の漕運については、星斌夫『蒙古占領下の華北における税糧輸送について』(『集刊東洋学』三、一九六〇年)、植松正『元初における海事問題と海運体制』(京都女子大学東洋史研究室(編)『東アジア海洋域圏の史的研究』京都女子大学、二〇〇三年)を参照。

(41) 『元史』卷六四、河渠志一、通惠河。

- (42) 『金史』卷一一〇、韓玉伝。
- (43) 『金史』卷二七、河渠志、漕渠。なお金代の漕河については、千傑・千光度『金中都』（北京出版社、一九八九年）一四三～一四六頁を参照。
- (44) 例えば、長瀬守「元朝における郭守敬の水利学とその成果」（『宋元水利史研究』国書刊行会、一九八三年所収）六四四頁。
- (45) 壩河については、蔡蕃『北京古運河与城市供水研究』（北京出版社、一九八七年）三九～四八頁を参照。
- (46) 「壩」については、新宮学「通州・北京間の物流と在地社会——嘉靖年間の通惠河改修問題をてがかりに——」（『山本英史（編）『伝統中国の地域像』慶應義塾大学出版会、二〇〇〇年）二〇頁を参照。
- (47) 前掲註(45)蔡蕃『北京古運河与城市供水研究』四五頁には、「元代坝河七坝推測位置示意图」が掲げられている。
- (48) 蔡蕃氏は、『秋潤先生大全文集』卷八〇、中堂事記の中統元年十月に「葫蘆套」に千斯倉が置かれたという記事から、中統年間ですでに壩河が運用されていたと考えている。しかし、この点はさらなる検討を要する。なぜなら、『析津志輯佚』「古蹟」（一一四頁）には、「葫蘆套 在城南西」とあって、葫蘆套が南城にあったと見なせるからである。また当然のごとく、中統年間には大都城の建設がなされていないことから、千斯倉は南城に建設された倉庫とみなすべきであろう。ただ、壩河が突如として開削されたというのも考えにくいので、至元十六年までに水路の基礎となる河道が存

在していた可能性は否定できない。

- (49) 『元史』卷八五、百官志一、戸部、都漕運使司。
- (50) 『元史』卷六四、河渠志一、壩河。
- (51) 大都に設置された倉庫については、丹羽友三郎「元代の倉制に関する一考察」（『名古屋商科大学論集』八、一九六四年）、及び前掲註(45)蔡蕃『北京古運河与城市供水研究』一五七～一六四頁を参照。

〔附記〕 本稿は東京大学東洋文化研究所で行われた、元代文書史料研究会（二〇〇四年二月七日）で報告した内容を大幅に増補改訂したものである。発表する機会を与えてくれた松田善之氏をはじめとして、参会された方々から貴重なご教示を頂いた（勿論、誤りの責任は筆者にある）。末筆ながら記して謝意を表したい。